エジプト・カイロにおける都市型隊商施設(ワカーラ)の
建築的実態と歴史的变化についてON ARCHITECTURAL FEATURES AND HISTORICAL CHANGES
OF WAKALA-S IN CAIRO, EGYPT

山田 幸正*

Yukimasa YAMADA

This paper refers to a few observations on architectural features and historical changes of wakala-s in Cairo, reporting some results based on a field survey of 73 existent examples in 1994 and 1995. Wakala-s in the Mamluks period were constructed rather on a large scale and well-organized, having a groin vaulted entrance passage-way and a trifoliate stalactite portal, as probably state facilities. From the 16th century onward, under the Ottoman, while the wakala-s remained to have the same arrangement of cells with vaulted alcoves, they adopted some peculiar features like a segmental vaulted portal and corbelled salients, playing commoner roles as urban commercial facilities.

Keywords: Urbanism in Islam, Caravansarai, Commercial facilities, Trade, Mamluks, Ottoman

イスラムの都市性, キャラバンサライ, 商業施設, 交易, マムルーク朝, オスマン朝

1. はじめに

10世紀後半に創建されたカイロ(カーヒラ)は、アラブ・イスラーム世界における「中心地」のひとつとして繁栄を享受してきた。特にマムルーク朝治下の13世紀後半から14世紀前半には、紅海から上エジプトを通るルートが主要な交易路となり、安定した農業生産にも恵まれ、経済的な繁栄期をむかえた。その後ペスト流行などで一時衰えをみせ、16世紀はじめにはオスマン帝国に属する一地方都市となったが、コーヒー貿易などによって徐々に回復した。そのような経済的な活動を支えてきたのが、「ワカーラ」と呼ばれる都市立地型の隊商交易施設である。

ワカーラは一般に「キャラバンサライ」と総称されるものに属するが、この呼称は現在、エジプトでしか使われていない。また、他の用語が郊外交易路上のものにも併用されるのに対し、ワカーラは都市に立地するものに限定して使用される¹⁾。「ワカーラ wakāla」という語は、「代理をする」を意味するアラビア語起源で、レバノンの14世紀前半の碑文のなかに「dār al-wakāla」という熟語としてみら

えるのが、碑文における初出例である²⁾。ここでは「バイト・アル・マール bayt al-māl」という国家機関に関連した施設で、国家から委任された代理人(ワキール wakīl)によって管理された公的な倉庫、あるいは物品入市税などを徴収する税務官庁の出先であった。この種の施設として歴史上カイロにおける最古の実例は、マムルーク朝アミール・クースーンが1330年頃建設したものといわれる³⁾。

高度に発達した商業社会であるイスラーム都市において、かつては重要な役割を演じたにちがいない、こうした都市型隊商施設について、特にそれらの建築的実態について、これまで十分に解明されているとは言い難い⁴⁾。そこで本稿では、カイロに現存するワカーラを取り上げ、おもに現地調査より得た資料に基づき、それらを建設年代に沿って整理し、その建築的な諸特徴を明らかにするとともに、その歴史的变化をたどりたい。

2. 調査の概要と研究対象

19世紀初頭に編纂された「エジプト誌」⁵⁾や19世紀末の

* 東京都立大学工学部建築学科 助手・工修

Research Assoc., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Tokyo Metropolitan Univ., M. Eng.

アリー・ムバーラクの「地誌」など⁶⁾から、レイモンらはオスマン朝期におけるカイロ（ブーラク地区を含む⁷⁾）に所在した405のワカーラを列挙し、そのうち393件について地図上に概略の位置を示している⁸⁾。これらの既往研究にもとづき行なった1994/95年の踏査の結果、総数73棟のワカーラが確認された⁹⁾。

地域ごとみると、オスマン朝期に245件あったとされるカーヒラ内で49例、60件を数えたズワイラ門から南でハリージュ（現ポート・サイド通り）以東の地域で7例、32件あったハリージュ以西の地域ではわずかに1例が、それぞれ遺存する。また、マムルーク朝期以来のカイロの外港であったブーラク地区には、現在16例のワカーラがみられる（オスマン朝期45件）。

このように多数のワカーラがすでに失われただけでなく、現存する73例の保存状態もけっしてよくはない。ほぼ完全な姿であるのは11例のみで、うちカーイトバーイ(No. 5; 訳語No. 5)、バーザルア(14)、ゲーリー(45)など7例がオスマン朝以前に属するものである。2階以上の上階が失われているものが多く、ファサードや1階中庭周囲の状況が分かるものは、ハサン・グムア(2)、ザハビー(28)、シャライービー(48)、ハルヌーブ(58)など30例ある。カイロで最古とされるクースーン(8)をはじめ、アッパース・アーガー(15)、ハサン・パーシャー(58)など7例はわずかに門や入口部分しか残っていない。

3. 建築的実態

隊商交易で取り扱われる商品の保管、陳列、売買取引など商業業務のための施設であるワカーラは、その上層階にラブ・fab'と呼ばれる集合住宅が併設されている場合が多い。ラブ・fab'は基本的に家族の定住用として賃貸されるもので、単独で建つもののほか、ワカーラや店舗など商業施設と複合化されるもの、宗教的複合体の一部をなすものなどがある。ワカーラの上階に載るラブ・fab'は、下階の業務用部分とアクセスを分け、ほぼ完全に分離されているものが多い。本稿では商業施設としてのワカーラを主題とすることから、ラブ・fab'（集合住宅）の部分については考察対象から除き、おもに商業目的に使用された1～2階部分を中心として考察をおこないたい¹⁰⁾。

現存する73例のワカーラを、①1517年のマムルーク朝滅亡以前、②それ以後17世紀末までのオスマン朝支配前期、③18世紀のオスマン朝支配後期、④19世紀以降の近代期、以上4期にわけて述べる。

【3-1 マムルーク朝後期の事例】 16世紀初頭までに属する遺構は、9例である（表-1）。

ナスル門の南側に立地するカーイトバーイ(No. 5)は、ブルジー・マムルーク朝第21代スルターンによって1480/81年に建造されたもので、ほぼ全体像のわかるカイロ最古の実例である¹¹⁾。敷地はおおよそ間口46m・奥行29mで、その面積は1,500㎡をやや上回る。街路側ファサードは比較的保存状態はよく、一部は5層まで現存する(図-1)。建物の南東隅部にはサビール・クッターブ（公共給水場およびコーラン学校）が附属した（崩壊）。また東側に10戸、南側に4戸の店舗（おおよそ間口2.5m・奥行3m；現在一つの喫茶店を除き、すべて工房）が街路に面して並んでいる。

2階平面図

1階平面図

図-1 カーイトバーイ(No. 5)

(エジプト考古庁資料: 1994年8月/12月調査)

表-1 マムルーク朝後期の現存ワカーラ（～1517年）

No.	名 称(建設年)	敷地面積 m ²	中庭面積 m ² (%)	居室数 ※非居室	アルコーブ m 形状 間口 奥行 高	入口ポータル m 形状 間口 奥行 高	扉口 m 形状 幅 高	入口通路 m 天井 間口 奥行 位置	店舗 (店舗数)	サビール 付置
8	Qasun(b. 1341)	3630	1232(34)	—	—	なし?	水平 3.0 4.0	—	—	—
46	Qaytbay(1477)	—	—	—	—	三葉/ワ 4.5 2.0 —	尖頭 3.5 —	簡/交差 3.0 6.5 中央	14	○
5	Qaytbay(1480/1)	1536	408(27)	31 23	尖頭 2.4~2.8 0.9~1.2 2.4	三葉/ワ 3.2 1.8 9.5	尖頭 2.3 4.3	簡/交差 2.9 9.5 中央	14	○
38	Fasqiya(b. 1496)	1248	222(18)	—	—	改装	—	—	隅	6? ×
35	Abu Zayd(1496)	973	168(17)	—	—	改装	—	—	中央	6? ×
45	Ghuri(1504-05)	1190	286(24)	34 22	(柱距: 幅 1.2m)	三葉/ワ 3.6 1.8 11.8	水平 2.4 3.8	簡/交差 3.0 9.1 中央	0	×
33	Qutn(1511)	2831	962(34)	—	円頭 2.6 1.8 3.7	三葉/ワ 4.4 1.5 8.9	尖頭 2.7 3.7	簡/交差 3.3 11.0 隅	15	×
40	Gallaba(1514)	864	—	—	—	なし?	水平 3.5 2.8	簡/交差 3.5 14.0 中央	8	×
44	Zarakish(b. 1516)	955	264(28)	—	弓形	三葉/ワ 3.7 1.3 9.2	水平 2.2 3.8	改装 3.1 12.9 中央	4	×

No.: 調査番号		敷地面積: 地籍図(注25参照)による概数		入口ポータル: 三葉/ワ=三葉形ヴォールト 弓形/ワ=弓形筒状ヴォールト 半円/ワ=半円アーチ・モルディンク	
中庭面積: 実測値または地籍図による概数/()内は推定		扉口: ()内は推定		扉口: 水平=水平まぐさ 尖頭=尖頭形アーチ 弓形=弓形アーチ 半円=半円アーチ	
アルコーブ: 尖頭=尖頭形筒状ヴォールト/円頭=円頭形筒状ヴォールト		入口通路: 簡/交差=筒形・交差ヴォールト 交差2=2連交差ヴォールト 木製扉=木製水平天井			
店舗(店舗数): 街路に面する居室数		サビール付置: 付置の有(○)無(×)		中央=中庭1辺の中央 隅=中庭の隅部 △=中央でも隅でもない	
—: 調査・測定不能、未調査など

図-2 グーリー (No. 45)

(エジプト結核館: 1994年8月/9月/12月竣工)

入口ポータルはマムルーク朝後期に独特な垂直性を強調したイワーン状をなし、建物のほぼ3層分の高さ(9.5m)に上下2部構成の三葉形ヴォールトが覆っている(図-21)。隅にムカルナスをおきアーチを交差させた下部に、尖頭形を正面にみせた小さな半ドームを冠した上部とからなる。入口通廊はおおよそ間口3m・奥行9.5mで、高さ約6.5mの尖頭形筒状ヴォールトで覆われている。ただし、扉口すぐ内側には交差ヴォールトがかかり、中心の八角形から8本の稜線が描かれている。建物の南北側それぞれに、正面入口とは別に簡素な戸口があり、上階への階段が備わる。

約26×11mの南北に長い長方形の中庭に面して配された計19室の小部屋(房室¹²⁾)のそれぞれには、奥行1mほどの尖頭形筒状ヴォールトがかかる前室部(アルコーブ¹³⁾)をもつ。房室もアルコーブ同様のヴォールトで覆われている。2階西側には1階房室と同様の筒状ヴォールトのかかる部屋が並ぶ。おそらくこれらは北西隅の階段(非現存)を通じ、1階と直接つながった業務用室として使われていたのではないだろうか¹⁴⁾。

マムルーク朝末期のスルターンにより1504/05年建設されたグーリー(No. 45)は、アズハル・モスクに隣接した市街地中心部に立地する¹⁵⁾。そのためか、建物の外形輪郭線は

極めて不規則で、1200m²ほどの敷地面積は前例よりやや小さいが、内部の部屋数は逆に多い(図-2)。街路側1階に店舗などを設けず、建物下層は切石積みの壁面が続き、閉鎖的である。中央の入口とは別に、東側に2つの小さな戸口が設けられている。アーチ形の戸口は奥に通路が続き、もう一方の矩形のものは3階への階段に通じている。

入口ポータルは前例以上にムカルナスを多用した三葉形ヴォールトがかかり、その高さは建物の4層分(約12m)ある(図-20)。前例と奥行は変わらないが、間口は1mほど狭く、その分ヴォールトの垂直性がさらに強調されている。しかし、内開き戸の備わる扉口は水平まぐさで高いものではない。幅3m・奥行9.1mほどの入口通廊は高さ6m以上の筒状ヴォールトで覆われている。ただし、扉口に近い約4.5mほどは、前例と同様の八角形を中心とした8本の稜線をみせる交差ヴォールトとなっている。

中庭はおおよそ南北26m・東西11mの矩形で、1階において東、南、西辺に八角形の石造ピアが立ち並び、内法幅1.2mほどの柱廊がめぐっていることが、前例との最も際立った相違であろう。柱廊に面して配されている房室の奥行は北辺のもので8m、東西辺の入口側のもので約4mで、間口は一部を除いて、概ね2.8~3mである。それぞれの房室は高さ約2.6mの尖頭形筒状ヴォールトで覆われている。2階において低い尖頭形アーチの連続する柱廊が中庭3辺をめぐるが、北辺は入口通廊によって途切れ、完全に一周していない。1階とはほぼ同じ位置に配された計27の房室はいずれも筒状ヴォールトがかかっている。構造的には1階の八角形ピアは2階までのび(断面は四角形となる)、アーチで連結されている。この中庭側ファサードが表わすように、機能的にも1・2階は一体で業務用として使用されていたものと推定される。このことは3階から上階へのアクセスが別の戸口・階段により街路から直接行われていたことからわかる(現在は中庭北東隅の階段が使われる)。

いずれも時の最高権力者が創建した建築物として、規模、構成、意匠などあらゆる点で代表的な作品である。1、2階諸室の扱いに相違がみられるものの、クトゥン(No. 33)やザラーキシュ(44)を含め、ほぼ共通した入口ポータルの意匠にその時代性が最もよく表れている。

【3-2 オスマン朝支配前期の実例】 16~17世紀の属する遺構は24例を数えるが(表-2)、そのうち16世紀のものはタグリーバルディー(No. 27)以外はすべてブーラク地区に所在する。煉瓦造の円形ピアがたつシナーニーヤ(70)を除き、それら16世紀ブーラク地区のものは概して敷地面積が大きく、その多くが1階に柱廊をめぐらす構成をとる。前述のグーリー(45)の柱廊とは異なり、幅員が広くとられ、アーチは1階で完結している。上階も設けられたが、高層な建物ではなかったらしい¹⁶⁾。入口通廊の高さは1階の階高内に押さえられ、入口ポータルも低く、三葉形に代わって弓形ヴォールトとなっている。

1617/18年建設のナカーディー¹⁷⁾(No.16)は東端のサビールを除き、面積700㎡あまりで現存遺構の中では中規模程度である(図-5)。間口3.8m・奥行1.4mの入口ポータルは高さ約4.8mの浅い弓形ヴォールトがかかり、外壁上部には石造持送りがつき、1.5mほどの張り出しを受けていた。弓形アーチがかかる扉口上部には六角形の結び目を持った紐状の装飾帯が施され、アーチ起拱部にはムカルナス状の柱頭らしき装飾がついている。奥行6.9mの入口通廊には2つの交差ヴォールトがかかっている(図-3/18)。一部改装されているが、およそ東西15m・南北13mの中庭に面して現在計13の房室が配され、概ね2.7~3.0mの間口に高さ4.1mの石造筒状ヴォールトがかかり、その前には奥行1.2~1.5mのアルコーブが備わる¹⁸⁾(図-4)。なお、南東隅部分には階段が備わるが、上階はほとんど現存していない。

ザハビー(No.28)は創建者の住宅(文化財No.72)と同じ1637/38年の建設と考えられてきたが¹⁹⁾、それよりも2~5年早い時期の建設とする説もある²⁰⁾。南東隅部に付属するサビール・クッターブを含めても敷地面積が266㎡しかない小規模なワカーラである(図-6/13/14)。間口3.4mに弓形アーチのかかる入口ポータルの奥行は極めて浅いが(0.5m)、その高さは5mほどで他に劣らない(図-22)。弓形アーチの扉口、アーチ周囲の結び目付き紐状装飾帯、アーチ迫り元の3段のムカルナス装飾なども前例とほぼ同様である。入口通廊は浅い筒状ヴォールトと、その奥に交差ヴォールトを組み合わせている。南北6.3m・東西8.3mの中庭に面して、南北辺に計5つの房室が1階に配されるのみである。これら5室はいずれも尖頭形ヴォールトで覆われ、当初はどれにもごく浅いアルコーブが備わっていた。アルコーブが浅いため、1階壁面上部には石材の持送りが各所につき、上階の無蓋の回廊(テラス)を支えている(図-13/14)。テラスに面して配された2階房室は1階同様、ヴォールト天井がかかり、尖頭アーチ形の扉口もいくつか遺されている。

図-3 ナカーディー/入口通廊

図-4 同/房室・アルコーブ

図-5 ナカーディー(No.16)

(1994年8月/9月/12月実測調査)

図-6 ザハビー(No.28)

(1994年8月/9月/12月実測調査)

表-2 オスマン朝前期の現存ワカーラ (1518年~17世紀末)

No.	名称(建設年)	敷地面積 m ²	中庭面積 m ² (%)	房室 m ² 室数 平均面積	アルコーブ m 形状 間口 奥行 高	入口ポータル m 形状 間口 奥行 高	扉口 m 形状 幅 高	天井 開口 奥行 位置	店舗 (商賈)	サビール 付属
61	Sukariya(1541/2)	1800	342(19)	—	—	弓形/ナ, 3.3 1.2 3.5	改装 —	筒/交差 3.0 9.0 中央	6	×
68	Kharnob(b.1571)	3540	955(27)	40 39	(柱廊:幅 3.0m)	なし	水平 2.3 2.9	筒/交差 3.5 11.0 中央	0	×
58	Hasan Pasha(1583)	8376	2550(30)	(58) (48)	(柱廊:幅 5.0m)	弓形/ナ, 4.3 1.1 3.4	弓形 3.0 2.8	筒/交差 3.9 13.6 中央	6	×
27	Taghri Bardi(16c.)	446	—	—	—	弓形/ナ, 3.6 1.3 5.2	弓形 2.6 3.8	筒/交差 4.5 18.0 中央	—	×
62	Dhahab(16c.)	1316	—	—	—	なし	水平 2.1 2.7	筒/交差 2.4 9.5 隅	0	×
63	Zayt(16c.)	3360	693(21)	(—部現存)	尖頭 —	改装 —	改装 —	筒/交差 3.0 10.5 中央	4	×
69	Rab' Sinaniya(16c.)	929	—	—	—	弓形/ナ, 3.5 1.5 —	弓形 2.5 —	筒/交差 3.2 10.0 中央	4	○
70	Sinaniya(16c.)	656	116(18)	2 47	柱型 2.8~4.1 0.9 —	なし	弓形 2.5 3.2	筒形 3.9 9.6 中央	4	×
59	Sarhan(16~17c.)	1424	234(16)	(24) (37)	(柱廊:幅 3.2m)	弓形/ナ, 3.3 1.5 4.8	弓形 2.4 3.4	筒/交差 3.0 7.0 中央	11	×
16	Naqadi(1617/8)	702	199(28)	13 17	尖頭 2.7~3.5 1.4~2.0 4.1	弓形/ナ, 3.8 1.4 4.8	弓形 2.7 3.9	筒/交差 2.9 8.6 △	4	○
28	Dhahabi(1637/8)	266	52(20)	5 15	尖頭 2.6~2.7 0.5 3.6	弓形/ナ, 3.4 0.5 5.3	弓形 2.3 4.5	筒/交差 3.1 4.5 △	3	○
20	Sawi(end. 17c.)	333	65(20)	7 21	尖頭 2.6~3.0 0.8 2.7	弓形/ナ, 3.4 0.6 3.4	弓形 2.3 2.7	筒/交差 2.5 3.2 中央	4	×
50	Radwan Bey(c.1650)	4280?	1780(42)	—	—	なし?	—	複/交差 — — 隅?	37	×
9	Oda Bashi(1673)	1474	—	—	—	弓形/ナ, — — —	弓形 — —	筒/交差 — — △?	9	○
13	Dha' l-Fiqar(1673)	3066	1196(39)	32 50	尖頭 3.4~4.1 1.5~2.5 4.0	弓形/ナ, 4.2 1.2 3.8	弓形 2.7 2.5	筒/交差 3.4 12.8 隅	11	×
15	'Abbas Agha(1694/5)	1452	—	—	—	弓形/ナ, 4.2 0.8 4.5	弓形 2.7 3.5	— — —	—	×
67	Shawam(16~17c.)	1870	—	—	—	弓形/ナ, 3.3 1.0 —	弓形 2.3 2.8	筒/交差 3.3 — △?	17?	×
26	Katkuda(17c.)	610	143(23)	—	尖頭 —	弓形/ナ, 3.5 1.0 —	弓形 2.8 —	筒/交差 3.0 9.0 中央	5	×
43	Matyali(17c.)	549	—	—	—	改装 —	改装 —	筒/交差 — — 中央?	4?	×
14	Bazar' a(end. 17c.)	1275	324(25)	25 34	円頭 2.3~3.6 1.5~2.3 3.2	弓形/ナ, 4.6 0.7 6.2	弓形 3.3 3.4	筒/交差 3.2 7.9 中央	7	×
7	Murgan(end. 17c.)	925	238(26)	—	—	弓形/ナ, — — —	弓形 — —	筒/交差 — — 隅?	2?	×
10	Shishini(end. 17c.)	626	226(36)	16 17	尖頭 2.5~3.1 0.7~1.7 4.2	弓形/ナ, 3.6 0.7 4.7	弓形 2.3 3.0	筒/交差 3.0 7.1 中央	0	×
66	'Asi(end. 17c.)	1155	—	—	(尖頭形アーチ壁のみ)	破損 —	破損 —	破損 —	—	×
72	Mirza(c.1698)	—	—	—	—	破損 —	破損 —	破損 —	—	×

聞き取りによると西側部分に3階への階段であったというが、3階部分はまったく現存しない。現状で各室は工房として使われているが、当初から2階は業務用として使用されたと考えられる²¹⁾。

この時期においては、サーウィー(No. 20)やシーシーニー(10)など小・中規模のものが建設されていることに留意すべきであろう。一方、17世紀後期にはオーダ・バーシー(9)、ズール・フィカール(13)、アッパース・アーガー(15)、バーザルア(14)など大規模なワカーラがお互いに近接した位置に建設されたことも注目される。しかも、いずれも筒状ヴォールトのアルコブ付き房室、弓形の入口ポータルや扉口、入口上部の張り出しなどよく似た意匠・構成である。

【3-3 オスマン朝支配後期の実例】 18世紀までに属する13例に加えて、年代不詳ではあるが、おそらく少なくとも5例はこの時代に含まれよう(表-3)。

入口の木製門扉にのこる彫刻の碑文により、アブー・アッルース²²⁾(No. 30)の建設は1718/19年とされる。商業的中心地に立地するため、1階部分は改修が多く、把握しにくい。入口ポータルは弓形ではなく半円アーチで、下端に細かなモールディングが付くが、扉口には依然浅い弓形アーチがかかる。入口通廊は例によって交差と筒形のヴォールト構成であるが、交差部が1.5mほどと狭くなっている。2階は中庭に面して650×1,130mmのピアが規則的に立ち、半円形にごく近いアーチで結ばれている(図-7)。中庭をめぐる幅員1mの回廊にも、ピアと各室の壁との間を低く浅い弓形アーチが結んでいる。これに面する計23の房室は半円アーチ状の扉口を備え、高さ3mほどの筒形ヴォールトがかかる。2階はすべて工房として使用されている。

シャラーイビー(No. 48)は創建者の死亡年(1725)から、18世紀はじめ、おそらく1710~20年代の建設とされる²³⁾。アルコブ付き房室が並ぶ標準的平面をした中規模のワカーラである(図-9)。入口上部は現在大きく破損しているが、出窓であったと推定される巨大な張り出しが設けられていた。入口ポータルは2層分ほどの高さに弓形アーチがかかり、高さに比して奥行は1mもなく浅いが、上部の大きな張り出しはその代わりであるかもしれない(図-8)。扉口上

方の壁面の結び目付きの紐状装飾帯やアーチ起拱点下部のムカルナス状装飾などはこれまでもみられたが、アーチのエクストラドスに施された波形の文様や壁面上方の4つの12弁形メダイオンは目新しい。

セルガーニー(No. 22)、キルダーニー(23)、ムハンマダイン(24)の3例はいずれも近隣に所在し、規模や構成に類似点が多い。特に後2者は互いに道を挟んで向かい合い、呼応するように門を開いている。また18世紀末の大規模ワカーラ、ナフィーサ(49)の入口ポータルは主要街路沿いに立地することもあって、極めて印象的な意匠がみられる。

図-7 アブー・アッルース(No. 30)

(1994年8月/9月/12月実測調査)

図-8 シャラーイビー(No. 48)
/入口ポータル

図-9 同/1階平面図

(1994年8月/9月/12月実測調査)

表-3 オスマン朝後期の現存ワカーラ (18世紀~1805年)

No.	名称(建設年)	敷地面積 m ²	中庭面積 m ² (%)	房室 室数 平均面積	アルコブ m 形状 間口 奥行 高	入口ポータル m 形状 間口 奥行 高	扉口 m 形状 幅 高	入口通廊 m 天井 間口 奥行 位置	店舗 (床面積)	トイレ
60	Ganbiat(17~18c.)	1383	—	—	なし	なし	弓形 2.9 2.1	簡/交差 4.0 11.0 隅?	—	—
64	Dukhan(17~18c.)	816	256(31)	—	尖頭 3.1 1.5 4.5	改裝 — — —	改裝 — — —	簡/交差 3.8 6.0 隅?	0	×
65	Magharba(17~18c.)	263	—	—	—	改裝 — — —	改裝 — — —	— — —	4	×
71	Khashab(17~18c.)	400	—	—	—	改裝 — — —	改裝 — — —	簡/交差 — — —	4	×
73	Zardakash(17~18c.)	519	—	—	—	改裝 — — —	改裝 — — —	簡/交差 — — —	3?	×
30	Abu ar-Rus(1718/9)	1192	357(30)	23 34	円頭 — — —	損/欠 3.9 1.0 —	弓形 2.5 —	簡/交差 2.8 7.6 隅	5	×
48	Sharaiyibi(ear. 18c.)	738	126(17)	18 31	尖頭 2.3~3.4 1.5 3.6	損/欠 3.8 0.8 7.9	弓形 2.5 3.3	簡/交差 3.0 5.5 隅	0	×
22	Sergant(18c.)	952	233(24)	19 28	尖頭 2.6~3.0 1.3~1.5 4.8	破損 — 0.7 —	弓形 2.4 2.9	簡/交差 2.8 7.2 隅	0	×
23	Kirdani(18c.)	1324	298(23)	19 28	なし — — —	損/欠 4.0 1.1 5.3	弓形 2.7 3.5	簡/交差 3.0 7.3 隅	7	○
24	Muhammaddin(18c.)	1037	398(38)	19 22	尖頭 2.9~3.1 1.5~1.6 —	損/欠 4.0 1.1 4.9	弓形 2.8 3.1	簡/交差 2.9 7.8 中央	7	×
42	Sanadqiya(18c.)	612	75(12)	—	なし(持送り)	改裝 — — —	改裝 — — —	簡/交差 2.8 11.0 隅	3	×
31	Shahin(18c.)	453	—	—	—	改裝 — — —	改裝 — — —	— — —	—	×
49	Nafisa(1796)	2288	683(30)	32 41	尖頭 3.0 1.5 —	損/欠 3.9 1.6 5.7	弓形 2.6 2.8	簡/交差 3.2 8.8 中央	7	○
3	Amir al-Guyush	304	—	—	—	損/欠 3.0 1.5 —	弓形 2.0 —	— — —	2	○
4	Ganaini	1155	322(28)	—	なし(持送り)	損/欠 3.0 1.3 3.6	弓形 — — —	簡/交差 3.0 10.0 中央	6	×
18	Kharoba	620	—	—	尖頭 — — —	なし — — —	弓形 3.5 —	— — —	4	×
21	Sa'id	—	—	—	なし(持送り)	なし — — —	弓形 2.2 2.2	簡/交差 2.8 12.0 隅	0	×
51	Khairi	868	140(16)	—	尖頭 — — —	損/欠 4.0 0.3 3.8	弓形 2.3 2.8	簡/交差 4.3 7.0 中央	4	×

すなわち、伝統的な結び目つき紐状装飾帯に加え、約2.6m幅の扉口にかかる弓形アーチ下端の細かなモールディング、その上部3段ほどのムカルナス、そこから直線的に斜め上方に迫り出されたチュンパノン、さらに半円アーチ状の2重モールディングなど、これまでにない装飾が目につく。また入口上部に大きく張り出した木製出窓は、完全な姿で残されている実例が少なく、特に注目される。

【3-4 近代期の事例】 19世紀以降のムハンマド・アリー朝などに属するものとして、年代不詳のものが多く含まれるが、22例とした(表-4)。

いわゆるハーン・アルハーリー地区内に所在するシラーフダール²⁴⁾(No. 34)の入口ポータルは極めて技巧的な意匠をみせる(図-10)。間口4.5mの開口部両側に2つの入り隅をつくり、そこに2本の円柱をたて、多重モールディングの施された半円アーチでそれらを結んでいる。最外周のモールディングはジグザグの縁飾(シェヴロン)となっている。その下のチュンパノンには、両側に紋章のような模様をおき、長方形に枠取りされた碑文が掲げられている。碑文のなかに記されたAH1235(AD1837)の年号が建設年とされる。2組の円柱は柱頭やアバックス、シャフトなどそれぞれデザインが異なる。浅い弓形の扉口の下端にも同様のシェヴロンが施されている。アーチ迫り元に柱頭飾らしきものは付くが、ムカルナス状をしていない。シェヴロンなどの濃密なモールディング、円柱のつけ柱などが、これまでのムカルナスや紐状装飾帯などに取って代わっている。このような意匠は、ホーシュ・ウターイ(No. 12)にも共通している。入口通廊はヴォールトではなく、高さ4.55mの木製天井で覆われている(図-19)。ただし、中庭に直接面する部分には、石造の半円アーチがかかる。

わずかに当初の姿を残す1階中庭北辺と東辺の一部からすると、ほぼ同形の房室が規則的に配列されていたらしい(図-12/16)。すなわち1階各室は間口2.55mに高さ3.81mの半円形筒状の石造ヴォールトで覆われ、その前面1mにはアルコーブ部分が付く。西側街路に面した別の入口から

図-10 シラーフダール/入口ポータル

図-11 同/2階中庭

2階平面図

1階平面図

図-12 シラーフダール(No. 34)

(1994年8月/9月/12月実測調査)

表-4 近代期の現存ワカーラ (19世紀以降)

No.	名 称(建設年)	敷地面積 m ²	中庭面積 m ² (%)	居室 室数 平均面積	アルコーブ m				入口ポータル m				扉 口 m		入口通廊 m				店舗 (前庭前)	付 属	
					形状	間口	奥行	高	形状	間口	奥行	高	形状	幅	高	天井	間口	奥行			位置
12	Hosh 'U'ay(1817/8)	—	—	—	尖頭	—	—	—	網ノ	—	—	—	弓形	—	—	—	—	—	—	—	—
34	Silabdar(1837)	1752	416(24)	29 29	円頭	2.5~2.6	1.0	3.8	網ノ	4.5	0.6	6.5	弓形	2.4	3.8	木製陸	3.1	10.1	隅	27	×
32	Haramain(1855/6)	1385	448(32)	23 37	尖頭	1.8~3.0	0.9~2.3	3.8	網ノ	3.8	1.1	3.8	弓形	2.5	3.2	筒/交差	3.0	6.4	△	4	×
19	Sinanin(19c.)	785	—	—	尖頭	—	—	—	なし	—	—	—	半円	3.5	—	破損	—	—	中央	12	×
2	Hasan Gum'a	268	62(23)	9 13	なし(柱型)	—	—	—	半球	2.4	0.9	4.9	弓形	1.6	3.1	木製陸	2.0	3.0	△	4	×
17	Tuifab	1572	244(16)	—	尖頭	—	—	—	網ノ	3.5	0.5	—	弓形	3.3	—	木製陸	3.3	20.0	△	2	×
11	Abd Zid	356	60(17)	7 20	なし(持送り)	—	—	—	なし	—	—	—	半円	2.1	3.5	木陸/筒	2.2	11.1	中央	3	×
47	Sa'id(ear. 20c.)	1933	233(12)	32 13	なし	—	—	—	なし	—	—	—	半円	2.2	4.7	木製陸	3.5	10.6	中央	43	×
1	Shuwaikh	—	—	—	—	—	—	—	なし	—	—	—	半円	2.2	3.4	破損	—	—	—	—	—
6	Qamb	384	—	—	—	—	—	—	なし	—	—	—	半円	—	—	—	—	—	隅?	2?	×
25	Sagha al-Cadida	348	57(16)	—	なし	—	—	—	なし	—	—	—	半円	—	—	改装	—	—	隅?	2	×
29	Gawhargiya	1715	494(29)	23 49	なし	—	—	—	なし	—	—	—	半円	2.4	4.7	木製陸	2.9	9.0	隅	0	×
36	Zankaloni	877	150(17)	—	なし	—	—	—	なし	—	—	—	半円	—	—	木製陸	3.2	13.5	中央	5	×
37	Za'abit	689	—	—	—	—	—	—	なし	—	—	—	半円	—	—	—	—	—	隅	18?	×
39	Ya'qub	1168	280(24)	—	なし	—	—	—	なし	—	—	—	半円	—	—	木製陸	3.0	7.5	△	38?	×
41	Qaffae	487	119(24)	—	なし	—	—	—	付柱	4.5	0.8	—	半円	—	—	木製陸	3.5	11.0	—	4	×
52	Umm al-Banat	360	—	—	—	—	—	—	網ノ	—	—	—	尖頭	—	—	—	—	—	—	3	×
53	Nabbas	729	—	—	—	—	—	—	破損	—	—	—	弓形	3.6	4.0	—	—	—	—	8	×
54	Mahmud	565	—	—	—	—	—	—	なし	—	—	—	半円	—	—	—	—	—	△?	5	×
55	Khalifa	830	154(19)	—	—	—	—	—	なし	—	—	—	半円	—	—	—	—	—	隅	—	×
56	Dabab	786	156(20)	—	なし	—	—	—	なし	—	—	—	半円	2.3	4.1	—	—	—	隅	6	×
57	Qutn	323	—	—	—	—	—	—	なし	—	—	—	半円	—	—	—	—	—	—	4	×

直接2階の柱廊にいたる。中庭四周に合計26本の煉瓦造ピア(770×570mm)をそれぞれ半円形アーチで結んでいる(図-11)。2階各室は柱廊とともに、高さ3.8mの木造天井がかり、南側の一部を除き、街路に窓を持ち、戸口脇には便所を備え、また室内が前後2つに分割されているものが多い。ワカーラとは別の入口・階段をもつことも含め、2階各室はもともと業務用ではなかった可能性が高い。

19世紀にはハラマイン(No. 32/図-15)のような保守的・懐古的な例外はあるが、半円形のアーチやヴォールト、木造天井などが一般的となる。さらに20世紀ともなると、サイド・パーシャー(47)やヤークーブ(39)など中心街路に面してたつ大規模な独立建物が現れる。前者では2階窓上部のペジメントなど西欧の影響がみられる。平面は極めて規則的で、1階の店舗・倉庫は四周の街路と通路のような細長い中庭に面して背割りに、2階も中廊下を介しておそらく事務室(現在倉庫が多い)が配されている。東西南北それぞれのほぼ中央に開く入口にはいずれも特別な意匠や装飾はみられず、実用的な「ビル建築」となっている。

4. 建築諸要素の歴史的变化

【4-1 建物規模】 カイロ最古とされるクースーン(No. 8)の敷地は地籍図²⁵⁾によると3,600m²を超え、カイロ旧市街内において、これに継ぐものにズール・フィカール(13)やクットン(33)があるが、概ね1,000m²を超えるものを大規模ワカーラとすることができよう。

現存例だけから言えば、マムルूम朝期のものはいずれも1,000m²程度以上の規模を有している。また、オスマン朝支配前期の16世紀、ブーラク地区において集中的に建設されたものは、ハサン・パーシャー(58)の約8,400m²を筆頭にいずれもかなり大きい。このことは当時、ブーラ

クが商業新興地区として極めて重要であったことを示唆するものである。一方、カイロ旧市街のオスマン朝期における初出例タグリーバルディー(27)が500m²に満たない規模であることが示すように、17世紀以降かなり小規模なものがみられる。ただ、大規模なものがその時々において建設されていることも指摘できる。とくに17世紀後半のラドワーン・ベイ(50)、オーダ・バーシー(9)、ズール・フィカール(13)、バーザルア(14)などは、カイロにおける商業交易活動の推移をみる時、注目されるものであろう²⁶⁾。

【4-2 房室配置】 いずれのワカーラにおいても中庭に面して房室が並ぶ。その大きさは15~50m²の範囲にあるが、20~30m²のものが標準的と言える。奥行は敷地などによって異なるが、間口は3m程度とほぼ一定している。一般にこれら房室は尖頭形筒状ヴォールトがかり、その前面には同じヴォールトのアルコーブが備わる(図-4/13~15)。しかし、オスマン朝後期より円頭形のものがみられること(図-16)、ゲーリー(No. 45)や16世紀ブーラクのワカーラにおいてアルコーブではなく、柱廊が採用されていることがこれにあてはまらない。

イスラーム建築のなかで中庭周囲にアルコーブを介して小室を配する構成は、よく知られるように、イランや中央アジアにおけるマドラサやキャラバンサライなどで中世以来長く用いられてきた²⁷⁾。カイロではマドラサやハーンカーなどにもほとんどみられず²⁸⁾、ワカーラに固有の建築形式であるといえる。もっぱら実用本位の建築であるワカーラに採用されているのであるから、やはり使用上に何かの利便があるはずである。ズール・フィカールの中庭を描いた19世紀の絵をみると(図-17)²⁹⁾、1階のアルコーブ前には低い柵が張られ、その上には木製の庇が差し懸けられている。アルコーブ周囲にはベンチやマシュラビーヤの衝立

図-13 ザハビー 房室

図-14 同/房室断面図

図-15 ハラマイン(No. 32) 1階房室立面図/断面図

(1994年8月/9月/12月実測調査)

図-16 シラフダール(No. 34)

1・2階房室立面図/断面図

(1994年8月/9月/12月実測調査)

など置かれ、人々が商談している様子が見てとれる。つまり、ワカーラにおける1階アルコーブは主として店舗として積極的に使われたらしい。2階も業務用とする場合、グーリー(No. 45)、バーザルア(14)などのように、各室は中庭周囲をめぐる柱廊に面して配され、上階に複合化されたラブア(集合住宅)とは異なる中庭意匠がみられる。ただし、ザハビー(28)にみるように、小・中規模のワカーラではテラス状の回廊とされることもある(図-6/13/14)。

【4-3 入口通廊】 ふつうワカーラは街路から中庭へ直線的にアクセスできる幅員約3mの通廊を有する³⁰⁾。17世紀までの実例では中庭を形成する1辺の中央に設けられるものが多い(表-1/2)。マムルーク朝期のものはその高さが6mを超え、中庭に面して開く房室のアルコーブより一段と大きく、明確にその位置が示されるが、2階の平面、特に回廊(柱廊)に影響を与えている。一方、オスマン朝期の例ではアルコーブとほぼ同程度の高さで、階高内におさまるようになる。後述する入口ポータルの意匠とも対応するもので、入口位置、建物への進入動線を中庭の中軸におき、ある種のモニュメンタリティが表現されている。

前近代の事例ではおしなべて筒状と交差の尖頭形ヴォールトを組み合わせた構成がみられる。マムルーク朝期の例では扉口直近より交差ヴォールトが用いられ、しかも単純な四分ヴォールトではなく、8本の稜線を描くものである。オスマン朝期のものでは扉口のすぐ内側1.5mほどはほかの通廊部分より一段高くなった浅い弓形の筒状ヴォールトとし、四分交差部がそれに続く(図-18)。19世紀以降の近代ワカーラでは、アーチ壁はみられるものの、もはやヴォールトとせず、木造天井となる(図-19)。

ファーティマ朝のナスル門(1087年)がおそらくカイロの現存遺構における交差ヴォールトの初出例であろう。それ以降の建築において交差ヴォールトはあまり一般的とは言えないが³¹⁾、建物入口に用いられた実例としてザーヒル・バイバルスのモスク(1266-69年)が挙げられる。ハーキム・モスク(990-1013年)の影響といわれる3箇所突出した門のうち、建物左右の門の外部側に交差ヴォールトが架かっている。ワカーラ入口通廊に普遍的にみる交差ヴォールトに直接つながる先例のひとつと考えられよう。

【4-4 入口ポータル】 1階街路側には、グーリー(No. 45)など若干の例外を除き、中庭に面する房室とほぼ同じ間口の小室が配されている。もちろんこれらは主に店舗として使われ、同じ街路に立地する他の店舗と一体となって、連続店舗群、いわゆるスークを形成している。

1階店舗が隣接するものと融合しているのに対し、入口だけは街路側ファサードにおいて際立って明快な形態・意匠をもち、ワカーラ建築における最大の特徴となっている。それはマムルーク朝期とオスマン朝期とはまったく異なるものであった。すなわち、マムルーク朝期においては三葉形ヴォールトであり、オスマン朝期ではそれが弓形のヴォ

図-17 ズール・フィカル(No. 13)の中庭 (コスト/1839年)

図-18 ナカーディー 入口通廊断面図 / 入口立面図 (実測図)

図-19 シラーフダール 入口通廊断面図

図-20 グーリー/入口ポータル

図-21 カーイトバイ

図-22 ザハビー/街路側立面図

ールトに変わる。さらに言えば、半円形アーチをモールディング状に重ねる近代の意匠へと変化した。ワカーラの時代性を最も顕著に表象するものと言えよう。

入口を強調する手法はハーキム・モスクですでにみられるが、アクマル・モスク(1125年)にみる深い溝を刻んだ上心の尖頭形ヴォールトの入口ポータルは街路ファサードを意識したものとして著名である。三葉形ヴォールトのポータルは、おそらく12世紀末のシリアにおけるムカルナス・ポータル³²⁾に連なるものと考えられる。それは約1世紀遅れて13世紀末頃カイロに導入されたが³³⁾、頂部の半ドームと下部のムカルナスからなるもので、しっかりとした三葉形に縁取られるのは1370年代以降のことであろう³⁴⁾。グーリー(No. 45)やクトゥン(33)は、この形式の三葉形ムカルナス・ポータルである(図-20)。一方、2つのカーイトバーイ(5/46)やザラーキシュ(44)にみる下部が交差アーチによるもの(隅にムカルナスを伴う)は、現存遺構ではアシュラフ・バルスバーイのハンカー(1432年)からのことで、その当時入口ポータルとしては最新の技法・意匠であったはずである(図-21)。モスクなど当時の宗教的モニュメントに多用されていた三葉形ポータルが、ワカーラにも見られることは留意したい。

オスマン朝になると三葉形はまったく姿を消し、かわって弓形ヴォールトの門構えがどのワカーラでも用いられる(図-18/22)。三葉形ポータルは、オスマン朝期を通じてモスクなどには見られるが³⁵⁾、逆にワカーラでごく普遍的であった弓形ポータルがそれ以外の建築ではまったく見られない。つまり、弓形ポータルはオスマン朝期ワカーラに固有のものであった。さらに、この時代のファサードに特徴的なのは上階の張り出しである。上階部分を街路側に張り出すことはマムルーク朝期から見られたが、オスマン朝期には石造の持送りを規則的に配して、より大きく1 m以上張り出すようになった。さらに18世紀以降ではシャラーイービー(No. 48/図-8)やナフィーサ(49)などのように、入口上部を特に強調する意匠まで現れる。マムルーク朝からオスマン朝にかけて共通していたのは、入口周囲の壁面に施された結び目つき紐状装飾帯³⁶⁾と、入口両脇のムカルナス状柱頭飾りである。

5. むすび

以上のように、カイロに現存するワカーラについて、時代をおって、その建築的特徴を明らかにすることができた。経済的な衰退期にはいった14世紀後半に、マムルーク朝スルターンらによってカイロ市内に隊商交易を管理する施設が建設され、やがてそれがワカーラと呼ばれるようになった。限られた現存遺構からでは断定的には言えないが、ある程度の規模で、形態的にすでに整っていること、中心軸に入口を構えること、交差ヴォールトや三葉形ポータルなど当時の宗教的モニュメントと同じ意匠や技法が使われて

いたことなどから、マムルーク朝期に建設されたワカーラは、公的な性格が強い建築であったと推測される。交易活動を奨励する一方、収益を直接吸い上げる目的をも担っていたのであろう。

16世紀になると、ナイル河畔のブーラク地区が商業的に脚光をあび、オスマン朝のワリーたちは相継いで巨大なワカーラを建設し、上述のような公的な役割はカイロ旧市街からかなり移されたのではないと思われる。そこではマムルーク朝期ワカーラとは異なる様式が採用された。

17世紀以降、依然、支配者による大規模ワカーラも商業需要に応じて建設されていたが、一方ではより小規模で一般的なものが数多く建設されるようになった。このことは家族ワクフが広い階層にまで浸透し、ワカーラ建築がその対象となったことを反映するものと考えられる。建築形態的には、アルコーブつきの房室、交差ヴォールトの入口通廊、弓形の入口ポータル、上階の大きな張り出しなどが統一的に用いられた。アルコーブの採用が商品陳列など店舗機能を必須条件としていたことを示唆するほか、弓形ポータルは固有の形態としてワカーラという建築種別を表示し、大きな張り出しは高密度な市街における複合的都市施設としての性格をよく示す。

18世紀にも基本的な構成は踏襲されるが、そのなかで均等配列による半円形のアーチやヴォールトなどが用いられるようになった。19世紀以降、平面構成はより規則的なものとなり、装飾的な付け柱や半円形モールディングなど、これまでとは異なる意匠が導入された。

現在ではその多くが失われ、遺存するとしてもまったく不完全な姿となってしまっている。かつては商業活動の中心的役割を果たしていたワカーラは、いまだ一部に伝統的商習慣などを残すとはいえ、ワクフ制度の崩壊など近代における社会的激変をまともに受けてしまった。

謝 辞

本研究は、平成6年度日本学術振興会カイロ研究連絡センター派遣研究員ならびにカイロ・アメリカン大学客員研究員として行った調査による成果である。カイロ滞在中、多くの方々のご支援、ご協力をいただいた。アメリカン大学イスラーム美術・建築学教授ジョージ・スキャンロン氏、マシュラビーヤ研究所アサド・ナディム氏には諸事にわたりお世話いただいた。お茶の水女子大学助教授三浦徹氏、プロバンス大学名誉教授アンドレ・レイモン氏、アメリカン大学教授ネリー・ハンナ氏には直接テーマに関することでご教授いただき、きわめて貴重であった。また、エジプト考古庁への調査許可などでは中近東文化センター主任研究員川床睦夫氏をはじめ、現地スタッフであるハーフィーズ氏、オマル氏にお骨折りいただいた。記して、心からの感謝の気持ちに代えさせていただきたい。

注

- 1) そのほか隊商交易に関わる建築は「キャラバンサライ *kārwānsarāy*」「ハーン *khān*」、「マンジル *manzil*」、「フンドゥク *funduq*」、「リバート *ribāt*」、「サムサラ *samsara*」など、各地で異なった呼称をもつ。キャラバンサライはベルシア、トルコで一般的に用いられる。ハーンも広く用いられる言葉で、アラビア語碑銘における初出例は13世紀はじめであり(1213年, RCEA, No. 3720)、都市内の倉庫・取引所として盛んに用いられるのは13世紀の後半以降のことである。マンジルという語は古いアラビア語文献に見られるが、今日ではほとんど使われない。マグリブ地方で一般的であるフンドゥクは、この種の施設を表す最も古い用語と言われる。リバートはイスラーム拡張期にその最前線に設けられた軍事的色彩の強い、布教のための拠点となる施設で、特にイランや中央アジアなど東方圏で用いられた。サムサラはイエメンなどでの呼称として知られ、他に「ヤーム *yām*」、「ティーム *tim*、ティム *timcheh*」はイラン・中央アジアで用いられる。なお、17世紀以降の西欧旅行者や商人たちはワカーラを訛って「オカル *okal*」と呼んだ。
: *The Encyclopaedia of Islam*, "MANZIL", pp. 454~457; "KHAN", pp. 1010~1017; "FONDUK", p. 945, new edition, E. J. Brill, 1979~
- 2) レバノン・トリポリの1336年(736AH)のもの; *Répertoire chronologique d'Epigraphie arabe*(RCEA); vol. XV, pp. 60-61, no. 5690/Raymond, A.; *Artisans et Commerçants au Caire au XVIIIe siècle*, Tome I, p. 245, Damas, 1973
- 3) RCEA; vol. XIV, pp. 268, no. 5590/Bercham, M. V.; *Matériaux pour un Corpus Inscriptionum Arabicarum*; vol. I(CIA Egypte), pp. 180-81, 1894/Raymond; op. cit., p. 245/しかし、碑文にはハーン *khān*と記されており、この当時まだワカーラが一般的ではなかったことがわかる。
- 4) Müller, K.; *Die Karawanserais im Vorderen Orient*, Berlin, 1920/Sauvaget, J.; "Les Caravanserais Syriens du Hadjdj de Constantinople", *Ars Islamica* IV, pp. 98-121, 1937/Sauvaget; "Caravanserais Syriens du Moyen-Age", *Ars Islamica* VI, 1939, pp. 48-55 & VII, 1940, pp. 1-19/Siroux, M.; *Anciennes Voies et Monuments Routiers de la Région d'Ispahan*, Mémoires de IFAO 82, Le Caire, 1971/Siroux, M.; "Caravanserais Seldjucides Iraniens", *The Art of Iran and Anatolia from the 11th to the 13th century A.D.*, London, pp. 134-149, 1974/Castel, G.; "Caravansérail d'Esna(1695)", *Annales Islamologiques* 14, Le Caire, pp. 165-176, 1978; いずれも交易路上の郊外型キャラバンサライを扱った論考。また、都市内に所在する施設を扱ったものはScharabi, M.; "Drei traditionelle Handelsanlagen in Kairo: Wakalat al-Bazara, Wakalat Du l-Fiqar und Wakalat al-Qutn", *Mitteilungen der Deutschen Archäologischen Instituts Abteilung Kairo* 34, Kairo, pp. 391-410, 1980/Aalund, F.; "The Wakalat Bazar'a", in *Islamic Cairo*, AARP, London, pp. 35-41/Yahia, F.; *Inventaire Archéologique des Caravanserais de Damas*, Aix-en-Provence, n. d./拙稿「モロッコ・フェズにおける都市型隊商施設(フンドゥク)の建築類型と商業的機能について」日本建築学会計画系論文集, 第482号, pp. 199-210, 1996年4月
- 5) *Description de l'Egypte*; 23 vols, Paris, 1809-28
- 6) 'Ali Pacha Mubarak; *al-Khiṭaṭ al-gadida*, 20 vols, Bulaq, 1888-89/このほかに、法廷文書 *Maḥkama*などが使われている。
- 7) 本稿では「カイロ」を「カイロ旧市街」と「ブーラク地区」に区別する。
- 8) Raymond, A. & Wiet, G.; *Les Marchés du Caire*, pp. 260-297, IFAO, le Caire, 1979/合計360件が挙げられている。ただし、付図(Plan V-VI)には計348件だけが位置がしめされている。また、ブーラク地区については下記に計45件のワカーラが列挙されている。
Hanna, N.; *An Urban History of Bulaq in the Mamluk and Ottoman Periods*, pp. 66-67, Fig. 9, IFAO, le Caire, 1983
- 9) 拙稿「カイロの隊商宿・ワカーラの現存状況」日本建築学会大会学術講演梗概集・1995年8月
- 10) ワカーラにラブアが複合化された建築形式は、「ワカーラ・ラブア *wakāla-rab'*」と呼ばれる。一般に、建物の下層部は石造のヴォールト構造で倉庫・店舗など業務用とし、上層部は比較的薄い煉瓦造壁と木造床組の構造で居住用とするものである。隊商交易施設と集合住宅というまったく異なる機能をもつ別個の建物を重ねて4~5層におよぶ高層建築とすることは、極めて特徴的なことではある。部分的に遺存するものを含め、わずか29例のワカーラ・ラブアについては、住宅史・都市史などの視点から稿を改めて論じたい。
- 11) No. 295, Raymond & Wiet; op. cit., p. 290/文化財No. 9; 文化財No. とは、Egyptian Survey Authority; *Index to Mohammedan Monuments on the Map of Cairo*(1/5000), 1951によるもの。「Athar No.」として緑色の標記に記されて、建物の壁面に表示されている。以下同様。
- 12) 1階中庭に面する小部屋を「房室」と称することにする。聞き取りによると、ハースル *ḥaṣil*(艸 *ḥawāṣil*)と呼ばれる; 「倉庫」の意。一方、上階の部屋についてはリワーク *riwāq*、また街路に面するものはドゥッカーン *dukkān*と呼ばれる。
- 13) 房室の前室部分を「アルコーブ」と称する。聞き取りによると、アイン *'ain*(「目」の意)と呼ばれる。
- 14) 中庭西側および中廊下に面した小室群は十分な採光・換気が得られないこと、通廊が中庭に面して壁で仕切られていないこと、通廊の張出し床を支える石造持送りの意匠が東側のものと異なること、北西隅に階段(非現存)があったことなどから、1階同様な業務用であったと考えられる。なお、中庭の東・南側はラブアの住戸が並んでいる。
- 15) No. 259, Raymond & Wiet; op. cit., p. 286/文化財No. 64
- 16) Hanna; op. cit., pp. 94
- 17) No. 212, Raymond & Wiet; op. cit., p. 281/文化財No. 397
- 18) 当初は計15の房室が中庭に面していたと推定される。
- 19) No. 73, Raymond & Wiet; op. cit., p. 267/文化財No. 411
- 20) Rifa' t Mūsā Muḥammad; *al-wakālat wa buyūt al-islāmīya fī miṣr al-'uthmāniya*, al-Qāhira, 1993, pp. 110~164
- 21) 2階各室は古文書ではハースル *ḥaṣil*と記されており、業務用であるといっても工房とは限らない。1階と同じ倉庫・店舗・事務所、あるいはここを利用する旅商人の宿泊室であった可能性もある。
- 22) No. 75, Raymond & Wiet; op. cit., p. 267-68
- 23) No. 313, Raymond & Wiet; op. cit., p. 292/文化財No. 460
- 24) No. 270, Raymond & Wiet; op. cit., p. 288(この建物は1820年に破却)/文化財No. 604(ファサードのみ)
- 25) al-haiya al-maṣriya al-'āma li-l-miṣāḥa(Egyptian Survey Authority); *khariṭa al-qāhira*, 1:500, c. 1938~45
- 26) Raymond, A.; *Le Caire*, Paris, 1993, pp. 253~262
- 27) Herzfeld, E.; "Damascus: Studies in Architecture-II", *Ars Islamica*, vol. X, New York, 1968, pp. 13~30
- 28) 旧市街の郊外カラーファ(墓地)内に所在するスルターン・イーナールの複合体(1451-56)内にみられる(文化財No. 158)。
- 29) Coste, P.; *Architecture Arabe ou Monuments du Kaire*, mesurés et dessinés de 1818 à 1825, Paris, 1839, Pl. XVIII
- 30) ズール・フィカール(No. 13)、サイド(21)、ガンブラート(60)などの入口通廊は屈曲している。
- 31) アイユーブ朝創建のシタデルの城門(1176年~)のほか、ザイン・アッディーン・ユースフのザーウィア(1298年/文化財No. 172)の入口の間、サラールとサンガル・ガウリーの廟とマドラサ(1303-4年/文化財No. 221)の廟背後の回廊などにみられる。
- 32) 最古例アレッポのマドラサ・シャードバフト(1193年)に始まるムカルナス(ストラクタイト)・ポータルの発展は、Creswell, K. A. C.; *The Muslim Architecture of Egypt*, vol. 2, 1952/1978, pp. 146-48
- 33) ザイン・アッディーン・ユースフのザーウィア(1298年)がカイロ現存遺構では初出例。
- 34) アッサンブガー・モスク(1370年/文化財No. 185)においてムカルナス・ポータルは正面に三葉形の枠取りがつく。これ以降のムカルナス・ポータルはほぼ例外なく、このような枠取りをもつ。
- 35) 例えば、マフムディーヤ・モスク(1568年/文化財No. 135)をはじめ、オスマーン・カトフダー・モスク(1734年/文化財No. 264)など。
- 36) 聞き取りによると、この装飾帯は"geft la'ab"と呼ばれる。

(1996年3月10日原稿受理, 1996年7月17日採用決定)